

「小児期からの慢性疾患予防対策に関する研究」 の総括

村田 光 範

要約：この研究は、主に小児期における動脈硬化促進危険因子の実態把握と、危険因子を効果的に検出する方法を開発することを目標になされている。実態把握に関しては、肥満は幼児期からその後の肥満と深く関係していると考えられる。その他の危険因子も同様の傾向があるが、さらに同一対象、あるいは集団について経時的調査が必要である。危険因子の検出方法については、小児での各種検査の正常値、インフォームド・コンセント、食生活調査を含めた検診方式のシステム化などが検討されている。

見出し語：危険因子、小児成人病、インフォームド・コンセント、肥満、高血圧、高脂血症、食生活、食事調査、正常値、運動、体力、小児成人病予防検診システム

わが国は第2次世界大戦後、急速に社会・経済的な発展を遂げ、最近では西欧型の先進国として、世界的な立場に立って活動している。この結果、豊かで、自由で、平和な状況のもとで小児も生活できるようになったが、一般に小児成人病といわれる健康障害が問題になるようになってきた。

小児成人病とは主に小児期からの生活習慣（ライフスタイル）が原因で生じるものであるが、生活習慣をコントロールすることにより、成人になっての健康障害を予防することができるものである。具体的には、小児期にみられる動脈硬化性病変を有する状態、明らかに動脈硬化危険因子（以下、単に危険因子）を有する状態、小児期にすでに成

人病といわれる病気を有する状態などである。この中で、危険因子が小児期に増加してきていることが、大きな問題になっている。

この研究班は、2つの分担研究を行っており、1つは危険因子を中心にした小児成人病の実態を調査するもの（以下、実態班と略す）であり、他の1つは小児成人病の効果的な予防についてのシステムを研究する（以下、システム班と略す）ものである。

小児成人病の実態については、学校保健と関連して、学齢期の小児においては、かなりの報告がなされているが、乳幼児については、まだその実態が十分に明らかにされていないのが、現状であ

東京女子医科大学第二病院小児科；

(Department of Pediatrics, Tokyo Womens' Medical College, Daini-Hospital.)

る。そこで、この研究班としては、幼児期に中心をおいて研究に当たることにしている。

乳幼児を対象にするには、その年齢によって対応が大きく異なるので、この研究班では、さし当たり3歳以後の幼児を主な対象にするという約束のもとに研究がなされている。

実態班では、幼児期すでに危険因子を有するものが、たとえば肥満に例をとると、3から5%ぐらいはあり、しかも幼児期の肥満はそれ以後の肥満と深い関係があり、小児期の肥満対策は、幼児期から始めなくてはならないことが明らかにされた。また、高コレステロール血症のトラッキングは幼児期から認められる傾向が指摘された。

幼児期の食生活を中心とした生活調査においては、食塩の摂取状態を簡便に把握するための研究がなされつつある。

幼児期の危険因子の頻度には地域差があることも事実であり、今後さらに検討する必要がある。

システム班では、基本的な問題として、このような研究を進めるに当たったインフォームド・コンセント、さらに家族歴調査や検診結果のプライバシーの保護、具体的な介入の方式が検討されている。インフォームド・コンセントや家族歴調査表などに関しては、合同研究協議会が、その基本案を検討することになっており、現在その作業が

進められてある。この協議会の決定を待って、システム班の本格的な小児成人病予防対策のシステム化（検診システム）が行われるのである。ただし、この協議会への基本的な問題提起は、このシステム班でなされており、インフォームド・コンセントや食事調査の原案がこのシステム班で研究されている。

学齢期を中心とした小児成人病予防システム化が実際になされており、その成果が1部報告されている。また、各地区で血圧検診や、危険因子の総合的スクリーニングがなされており、その成績も報告されている。

小児期の運動と危険因子の関係についても報告されているが、今後この方面の検討が十分になされることが重要である。

小児成人病予防対策システム化には、各種測定値、例えば血清脂質、血圧、肥満判定基準、運動能力の測定などの基準が定められなくてはならないが、これに関する研究がシステム班と関連を持ちつつ現在全国的な規模でなされている。さらに世代別血清脂質の標準値の検討が1991年に検討されることになっている。これらの研究と共同で、システム班の作業を進めることも今後の課題の1つである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:この研究は、主に小児期における動脈硬化促進危険因子の実態把握と、危険因子を効果的に検出する方法を開発することを目指されている。実態把握に関しては、肥満は幼児期からその後の肥満と深く関係していると考えられる。その他の危険因子も同様の傾向があるが、さらに同一対象あるいは集団について経時的調査が必要である。危険因子の検出方法については、小児での各種検査の正常値、インフォームド・コンセント、食生活調査を含めた検診方式のシステム化などが検討されている。